911.168
Y92
911.168-Y92ウ
1200500755859

始

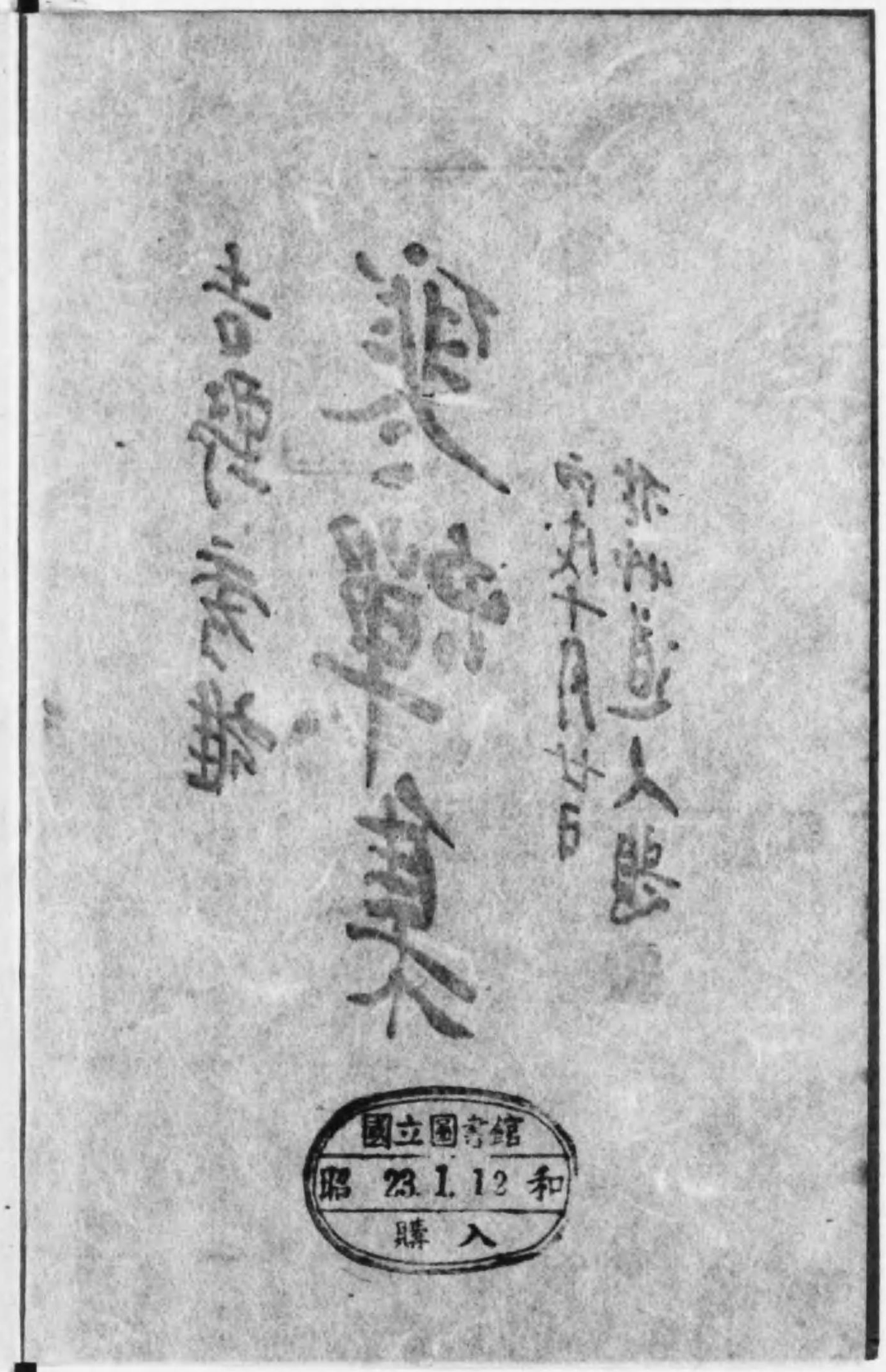
911.168
Y92

吉野秀雄

寒蟬集

丙戌十月廿日
雅仲道人題

国立国会図書館
昭 26.1.12
納入



寒蟬集目次

玉簾花（百一首）……一
百日忌（十三首）……三
彼岸（十三首）……四
乙酉年頭唫（十四首）……四
仰寒天正述傷心（十首）……四
寒日訪友（十二首）……五
狩野河畔（七首）……五
修善寺雜歌……六
獨鈷之湯（二首）……六
梅林（十首）……六
源頼家墓（二首）……六

湯宿（三首）……九
桂川小景（二首）……一〇
山鳥（八首）……一一
戸田街道（三首）……一四
三島明神（二首）……一六
函根遠望（一首）……一七
富士……一八
大仁にて（八首）……一八
修善寺にて（五首）……二〇
三島にて（七首）……二二
三島大社にて（一首）……二三
雪の日（八首）……二四
きさらぎ（八首）……二六
觀古……二九

弘仁佛手（三首）……二五
天平佛手（三首）……二六
病臥二旬（二十首）……二八
紅梅（二首）……三〇
鎌倉落花（六首）……三〇
送別……三〇
松本たかし疎開（三首）……三〇
中村琢二疎開（二首）……三〇
晩春雜歌（六首）……三〇
建長寺（一首）……三一
訪印人善雅（三首）……三一
夏季小吟（七首）……三二
幽石軒前庭（二首）……三二
敗戰（七首）……三二

亡妻小祥忌前後（十五首）……一三五
夜間瀬川（五首）……一三八
秋霖（五首）……一三一
秋艸庵（十二首）……一三五
北海大風（六首）……一三八
旅上偶成（五首）……一四一
西芳寺林泉（十三首）……一四三
法隆寺（十二首）……一四八
藥師寺……一五三
塔婆（六首）……一五三
佛足石を拜して故里に病あつき母を懷ふ（三首）……一五五
東塔遠望（二首）……一五七
唐招提寺（五首）……一五八
金堂（三首）……一六〇

開山堂（一首）……一六一
室生路（五首）……一六二
猿澤池（二首）……一六四
ある朝投身屍體を見る（一首）……一六五
志摩（十五首）……一六六
たらちねの母（十七首）……一七三
上州富岡にて納骨の折に（三首）……一七八
またおもひいでて（一首）……一七九
後記……一八一

寒蟬集目次　終

かんせんしふ

玉簾花

昭和十九年夏妻はつ子胃を病みて鎌倉佐藤外科に入院し遂に再び起たず八月二十九日四兒を殘して命絶えき享年四十二會津八一大人戒名を授けたまひて淑眞院釋尼貞初といふ

古疊を蚤のはねとぶ病室に汝がたまの緒は細りゆくなり

日盛りに壕掘りいそぐ横須賀のちまたうろつき藥をさがす

八月の西日除けむと丸窓に板戸を閉して汝を病ましむ

ふるさとの貫前の宮の守り札捧げて來つれあはれ老い母

服ますべき藥も竭きて買ひにけり官許危篤救助延命一心丸

病む妻の足頸にぎり晝寢する末の子をみれば死なしめがたし

自轉車をひたぶる飛ばすわが頰を汗も涙も滴りて落つ

氷買ふ日毎の途にをろがみつ饑渇畠の六體地
藏

病室の隅に雙膝抱くわれを汝は怪しまめすべ
もすべなさ

生かしむと朝を勢へど蜩の啼くゆふべにはう
なだれてをり

額冷やすタオルの端に汝がなみだふきやりて
はたわが涙拭く

手を束ね傍看るごとくおろおろと默せる我を
詰りてくれよ

坐りてはをりかぬればぞ立上り苦しむ汝をわ
れは見おろす

幼子は死にゆく母とつゆ知らで釣りこし魚の
魚籃を覗かす

提げし氷を置きて百日紅燃えたつかげにひた
嘆くなれ

病妻の胃腑のいたみさ夜中のわれにひびきて
胃の疼きくる

物食はむ力もつきし汝が膳をいきどほりもち
て我はむさぼる

炎天に行遭ひし友と死近き妻が棺の確保打合
はす

歩みゐて流るる涙のこはねば道邊人はいぶか
しみ佇つ

九州を米機の襲ふ夕まぐれ妻の呼吸のやうやくけはし

潔きものに仕ふるごとく秋風の吹きそめし汝が床のべにをり

をさな子の服のほころびを汝は縫へり幾日か後に死ぬとふものを

この秋の寒蟬のこゑの乏しさをなれはいひ出づ何思ふらめ

院内に居處もなくて物干場のかげに煙草を吸ひつつし哭く

今生のつひのわかれを告げあひぬうつろに迫る時のしづもり

遮蔽燈の暗き燈かげにたまきはる命盡きむと
する妻と在り

をさな兒の兄は弟をはげまして臨終の母の脛
さすりつつ

母の前を我はかまはず絆切れし汝の口びるに
永く接吻く

隣室の患者憚り聲あげて泣きも得せずて苦し
よわれは

息絶えし汝の面の蚊を追ふと破れ團扇をわが
はためかす

事つひにここにいたりぬ死床の敷布の襞をわ
れはみつむる

亡骸にとりつきて叫ぶをさならよ母を死なし
めて申譯もなし

命なき汝が唇のうごめくと母はつぶやきわれ
も然見つ

夜の風に燈心蜻蛉ただよへり汝がたましひは
すでにいづくぞ

新聞紙を吳れよなどいふ老母は屍體に何をな
さむとすらむ

探照燈の光箭交す夜空なり生死一大事決まり
たるなり

さ夜更けの風は冷えびえ秋めきて汝が死面に
觸れかゆくらし

死顔に化粧したれば須菩提の下脹れなるおもざしに似つ

老母とふたりの通夜の夜のほどろ瓶のカンナをあふる風つよし

とことはになれは死にせり八月二十九日曉方月赤く落つ

遺されし吾と老いははにあかつきの梟きこゆ千葉谷より

汝が魂はいづくさまよふ末の子の手をひき歩む夜の道暗し

わが門に葬儀自動車の止まれるこの實相をいかにかもせむ

屍にもいまは別れむ泣きぬれて歎異の鈔を誦
しまつりつつ

葬儀車に乗せられし汝をいつくしみ柩の蓋に
掌を掛けてゆく

隱坊は汝が喉佛の全きを珍らしむなり佛にな
れよ

手抱ける汝が骨壺に溫みあり山をとよもす秋
蟬のこゑ

たらちねの母に別れし四人子の頭を撫づれお
のもおのもに

葬儀用特配醬油つるしゆくむなしき我となり
はてにけり

いのちありて汝が作りし南瓜とトマト供へて
葬ひをなす

汝等の胸に母在りとをさならに説ききかしつ
つこころ虚しよ

よしゑやし捺落迦の火中さぐるとも再び汝に
逢はざらめやは

葬ひの済みてもろびと去りゆけば疲れきりた
る子らは丸寝す

母死にて四日泣きゐしをさならが今朝登校す
一人また一人

よろめきて崩れ落ちむとする我を支ふるもの
ぞ汝の霊なる

とむらひの後のあらまし片づきて飯米の借が
少し残りぬ

をさな子が母を夢みし語り言くりかへしわれ
は語らしめつつ

汗たらし駈けめぐる時耳元にわれをねぎらふ
妹が聲すも

これの世に生くらむ限り果てしなく底ひもわ
かぬわが嘆きなれ

長の娘を母によく似つと人いふにつくづく見
つめ汝ぞ戀しき

あはれ汝が去年積みし戰果貯金もて廚子と位
牌をあがなひ得つる

配給酒時たまありてわれは酔ふ何をたどきに
子らや生くべき

野菜買ひて暗き野道に伴れだてば子や想ふら
しその母わが妻

摘みえたる野菊犬蓼藥師草妹がみたまは家に
待たむぞ

工場より日暮れ疲れて戻る子をねぎらふ聲よ
彼世ゆひびけ

配給の麥酒もてきて飲みかはし大佛次郎われ
をはげます

しろたへの一重の布を纏ふのみ汝のお骨は冷
えまさるべし

いくばくか汝にかかはるかもかくもひたぶる
に唱ふ速證菩提

澁柿をあまたささげて骨壺のあたりはかなく
明るし今日は

酒のみてしだいに痺れくるわれをいづくにか
別なる我が意識す

山茶花は白磁の瓶にふさへりと汝がいひしご
と挿して供ふる

鉦叩蟲かね打つなべに蜩蟬の蟬は經誦むなれ
のみたまに

しみじみとおもひひそめて哀しまむ一日だも
なくて今日七七忌

秋の夜を暇つくりて子供らに物教ふるぞいま
のなぐさみ

雨ながら門の木犀匂へればわがなげかひも五
十日經にけらし

臺所に泣く女童よ叱りたる自が父われも涙ぐ
みゐる

なれ失せて半ば死にけるうつせみを搖り起た
して生きゆかむとす

この秋の庭に咲きいづる玉簾花骨に手向くと
豈思ひきや

つぎつぎに供ふる草の花枯れて汝が骨つぼを
秋の風吹く

人の妻傘と下駄もち夜時雨の驛に待てるをわ
れに妻亡し

念佛をとなへながらに或る折のなまめきし汝
が聲一つ戀ふ

子供部屋に忘られし太鼓とりいでて敲ちうつ
こころ誰知るらめや

骨壺の前にころぶすうつし身を吹く秋風はす
でに寒けれ

母死にて幾日か經つと朝牀の子は朝牀のわれ
に言問ふ

酒酌めばただただねむし骨髓に澱む疲れのせ
むすべもなさ

股長に共にいを寢しぬばたまの夜床冷き巖と
化したり

庭先きの檀の朱をうるはしみ妹が骨壺ふりか
へりみつ

ほつほつと椎の實食ぶる幼吾子眼には見るら
し母の寫眞を

しぐれの雨をりをりさわぐ夜のほどろねむる
子らあはれ眠らえぬ身あはれ

ますらをのわが泣く涙垂り垂りてなれがみ靈
を淨からしめよ

醉ひ痴れて夜具の戸棚をさがせども妹が正身
に觸るよしもなし

自轉車に乘りゐて誦する心經をいづくのそら
に妹やうべなふ

麥蒔きの學徒奉仕にはげむ子が野の邊に母を
戀ふといはずやも

うつしみの身もたな知らに嘆かへば一塊づつ
や肉削げぬべし

蟷螂の黃いろく枯れて動かざるかかる命もみ
すぐしかねつ

末の娘と障子の穴をつくろへり汝の位牌に風
は沁ませじ

おのづから朝のめざめに眼尻を傳ふものあり
南無阿彌陀佛

風呂にしてわれとわが見る陰處きよくすがしく保ちてをあらな

日のくれの道に獨樂打つわらべらのいづれか家に母の待たざらめ

渚近く鰡の跳ねとぶ夕まぐれわがかなしみは極まらむとす

孤身に寒さはひびき管制の燈の下に孑然とをり

百日忌

家出づるお骨の母を見送ると曉の寒さに慄ふ
をさなら

年の瀨の星屑滿つる天の下汝が骨壺をかかへ
もちたり

骨壺を入れし鞄は上の娘とわれと互みに膝に
のせあふ

多胡の野のもみぢ葉晴れてふるさとへ汝のみ
靈はいま歸り來ぬ

冬枯るる大桁の山雪白き淺間の嶺や魂も見よ
かし

城山にもみぢ折りしはむかしにてけふの黄葉
のむなしき明り

四五人がただただ寒さのみいひてここの野寺
に百日忌終る

堂裏のがたびし歪む骨棚になれのお骨を載せ
て去るなり

銀杏散り枯菊残る寺庭のこの夕靜をたちさり
あへね

酒のみて我は泣くなり泣き泣きて死にしにし者
の母にうつたふ

人の世はさぶしくもあるか年暮るるふるさと
の驛に參宿を贈て

妹失せて百日餘り經しいまもかも胴の震への
やむ時はなし

歳暮るるこの寒空に草鞋はき帷衣を著て吾妹
やいづこ

彼岸

霧雨のすがしき朝は松が枝の絲瓜の花を妹と
見にしを

かの際におのが生涯をつきつめて幸ひとなし
て汝はほほゑみし

生きのこるわれをいとしみわが髪を撫でて最期の息に耐へにき

信ずれば子らを頼むといまさらにあにいはめやといひて死にけり

眞命の極みに堪へてししむらを敢てゆだねしわぎも子あはれ

これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹

ひしがれてあいろもわかず墮地獄のやぶれかぶれに五體震はす

ひねもすの夜もすがらなるをのがきゆ何にすがりて飜らむか

したたるや血の一路をおし拓く遂の力もあり
とせなくに

死ぬ妹が無しとなげきし彼岸を我しぞ信ず汝
とあがため

冥府に魂合ふらむぞ生きのこるこころ咽びも
或はまほろし

不生不滅空之又空さは然あれ切り刻まるるこ
のわが現實

哀しみを基とするうつし世にいたぶられつ
つ果てもこそなけむ

乙酉年頭唫

たちかへる歳の旦の潮鳴りはみ國のすゑのすゑ想はしむ

元日の曉起きに卷脚絆固くし締めてまうらすがしも

燒酎に葱少しもてりあたらしき年のはじめとさらに勢はむ

雜煮餅妹が位牌にまづ供ふ春としもなき家内のしづもり

水仙を挿せる李朝の德利壺かたへに据ゑて年あらたなり

陶壺の水仙の花に面寄せて清き香をきく年の
はじめに

配給の餅かぞへて母のなき四たりの子らに多
く割當つ

一切れの堅き肉噛み齒齦いたし痛きもたぬし
歳のはじめは

鶴岡の霜の朝けに打つ神鼓あな韆韜と肝にひ
びかふ

夕餉には馬肉煮るべし晝過ぎて雪催空窗に垂
りたり

脚絆つけ外套を著て家ぬちを旅の上なるごと
く往來す

亡き妹の庭作りせし馬鈴薯が年越して縁の下に残れる

大寒のさ夜のくだちに時定めてわが目覺むるは妹の呼べかも

既在其中矣とふ言葉をわれはつぶやく朝ゆふべに

仰寒天正述傷心

註　織月に見る地球照を假に「魄」といひなしつ

うつし身に風花散らふ夕まけてするどき月は中空に顯つ

冱えわたる氣遼き空に三日の月宵の明星と息づきかはす

東空にかげなす魄をかき抱くかぼそき月よ妹
ぞこほしき

三日の月つめたき陰體をかかへけり妹のみ靈
を吾がまもるかに

弓月の魄の面昏くかつ光りぬ消えてあとなき
妹と思はめや

月の輪に妹が眉引きたぐへもてわが戀ふらく
はいたもすべなし

おもかげをしのぶ情は纖月の光研ぎ出す天に
さまねし

よひ早くい照る三日月あが戀ふるおもひ堪へ
ねばたわやかに見ゆ

人の身ははかなきものか初月の利刄の鎌をも
亡き妹として

鈍色の魄もつ二日三日の月現れいづる時し一
生なげかむ

寒日訪友

滑川堰のあくたに水仙の捨花見ゆれ正月二十
日

冬川の岸の氷にこまごまとにじむ影あり欅の
小枝

我を待つ友おもひゆく山みちに深冬青歯朶陽
をたたへけり

亡き妻を嘗ていたはりし岡の上にけふひとり
立つ眼には枯草

一むらの絮毛のすすき冬岡のひかりを吸ひて
ほしいままなる

友が扉をいまだ敲かず門べなる山菅の實にか
いかがみをり

裏山にみづから伐りし木の株を煖爐にくべつ
君が心根

アトリエの煖爐燃えさかりねもごろに友は薪
になほ鉈振ふ

火爐に寄るわれら四人に友が妻大根の汁を配りめぐりぬ

妹なしのわれをさびしくあらせじと友は無理して夕餉もてなす

雑炊にまじるを箸に掘りて食ふ伊豆の椎茸肉のごとしも

道芝によごれける雪これをこれ夜深き月の光はさいなむ

狩野河畔

亡き者の手紙身につけ伊豆の國狩野の川べの
枯草に坐り

冬くさの黄なるを友と敷きなしてことば少し
妹をしぞ戀へ

冬ふかき狩野の流れは兩岸の篠生をも籠めて
あやにかがよふ

平かに日ざしなごめる冬川の二分れして彼方
寒き瀬

舟橋の五艘の舟の片べりに陽炎もゆれ春しか
へらむ

おのづから藁塚の影むらさきに伊豆の涸田は
冬日あまねし

旅ごころわが身を責むれうちわたす伊豆の入
野に野火の跡著し

修善寺雜歌

獨鈷之湯

桂川中洲に獨鈷おし立てていで湯を齋ふいに
しへよいまに

中つ世の鎌倉びとも山川にたよらに走る湯を
浴みにけめ

梅林

しみじみと放つ尿は黄の草に影ゆらめきぬ伊
豆の枯山

花に早き梅の林の片側を圍ふ赤松に夕日沁み
たり

梅の園蕾固しといさぎよき楚枝の青さ觀つつ
めぐらふ

冬園の梅も躑躅も老木にて手觸らくきびし苔
の乾びは

椎の樹の常蔭夕づき白しとも白き花もつ梅を愛しむ

枝凍る二月の梅の林より光嚴しき富士を見放けつ

一株の山吹の冴え目をうばふみ冬ざれたる梅園にして

下作る茶畑すでに暗みゐて冬の梅ぞの暮れなむとする

わが四人かくて去りなばこの夜らはこの梅山に雪流るべし

春淺き山の降りに繪具箱さげゆく友が後姿よ親し

源頼家墓

範頼の墓よりめぐり頼家の墓なき墓はさらに
悲しも

尼御臺が事濟みてのちに來て哭きし左金吾督
源頼家の墓

湯宿

湯の宿の溪川ぞひの石垣に冬を凌げる齒朶の
類青し

これもかも亡き妹戀ふるよすがとて旅にあが
なふ折本御詠歌

橋の上に畫を描く友に雪散れば宿の欄干ゆわれはみつむる

桂川小景

湯の町の川の中渚に雌雄三羽家鴨ねむりて沫雪ながる

頸入れて家鴨ら眠る渚をはさみせせらぎさむく鳴り交すなり

山鳥

尾羽長く赤き山鳥置かれたりしぐれて戻る障子の内に

谷の門のすそ山斑雪ゆふづきてしきりにむし
る山どりの毛を

やまどりの毛羽捨てに出て谿川の暮れ入るい
ろの黝きを見たり

山鳥の腹をほどけば啄みし零餘子の葉かもま
さに匂へる

旅にして山どりの骨をたたき合ふ友との縁浅
からめやも

やまどりの骨のたたきを鍋に掛け煮えむ待つ
間と湯壺にくだる

四本の酒三人が飲みて嗜まぬ一人の友も酔ひ
けるに似つ

山鳥の尾ろの秀尾の十節羽は翳してゆかな旅
のしるしに

戸田街道

酉伊豆の海邊に向ふ山道に雪解の泥の光まぶ
しき

雪の山二つ望みてあたたかき戸田街道はここ
ろがなしも

向う山の段段畠かがやくは若木の桑か春は近
しも

三島明神

神門のみぎりひだりに豐稻を掛け連ねたり伊豆一之宮

節分の人出の中に神苑の池はきびしく氷りつめたり

函根遠望

雪雲は函根山脈にむらがりてその一峯に日あたる面あり

富士

大仁にて

我命をおしかたむけて二月朔日朝明の富士に
相對ふかも

きさらぎの淺葱の空に白雪を天垂らしたり富士の高嶺は

朝富士の裾の棚雲遠延へて函根足柄の嶺呂を
蔽へり

この岡の梅よはや咲け眞向ひに神さびそそる
富士の挿頭に

富士が嶺の氷雲のひまを見据うれば、いただき
近く雪げむり立つ

雪冴ゆる富士をそがひにあしびきの山松林風
とよむなり

富士がねの雪のなぞへにはばまれて雲二方に
別れゆくらし

富士の肩の雪の稜角くきやかにただ一息の線
を張りたり

修善寺にて

赤松にまじるくろ松黒松の太しき間に高し冬
富士

二もとの松の劃れる空占めて富士の片面は夕茜すも

富士が嶺の裾雲の下なだらかに伊豆の冬山左右に並み伏す

前山はその草がれに夕日燃え富士の白妙いよよすがしも

麓ぐも斜に曳きて富士が嶺のおもたく西に傾けり見ゆ

三島にて

くしぶるや富士の高秀は天雲をおのが息吹きと巻きかへしつつ

一ひらの雲の冠散るなべに富士の全容いまぞ
観るべし

富士がねの彼面此面や雪映えてあくまで清き
傾斜なしたり

夕富士は吹き晴れにけり低山にみだるくろ雲
雪降らさむか

富士がねをひとりさやけくあらしむと函根の
山に雪雲凝りつ

太白星の光増すゆふべ富士が嶺の雪は蒼めり
永久の寂けさ

時久に凝視らふ富士の霊異の魂わがむらぎも
を揺りてすがしき

三島大社にて

御社の華表の前にふりさけて立春大吉富士は
雲なし

雪の日

かきくらし雪降るゆふべ六人に五切れの鰤が
配られきたる

雪天を空襲サイレンけたたまし靡かふ雪にわ
が裂くる鋭日

亡き妻が殘ししし炭をけふの雪にやや贅澤につ
ぎつつぞ想ふ

しんしんと雪積る日はみ佛に焚く線香も妙に
身にしむ

わぎもこが位牌納むる廚子の上の塵をかなし
む雪の明りに

雪しまくくらき外明りさしそひて障子の紙は
飴色なせり

居酒屋にわが醉ひし間を自轉車のサドルにし
るく雪たまりけり

たどり來し夜半の雪道ここに岐れ細き一すぢ
は寺に入りゆく

きさらぎ

み佛に供へし膳の菜をかててしみじみ嘗めつ
合成酒二合

竹垣の横の締竹寒明けの月をきびしく照りかへしたり

子にいはれわれと氣のつく獨言妻亡きのちに癖づきぬらし

感冒に臥す枕のうへに鰹節をわが削りをりやがて食ふべく

兩面羊齒の瑞葉相寄り一抹けのきよき粉雪をささへもちけり

掃き寄せし埃の中より尺餘りの紐と燐寸の軸
一つ拾ふ

あなあはれ妹がみ靈にたく香のかをりこもり
てゆふべひもじき

滑川の水際こごしく氷りけり蜜柑の皮をあま
た閉めて

觀古

弘仁佛手

み佛の曝れたるみ手にふほごもる千年のぬく
みあやしくもあるか

毀たれてみ手一つなるみほとけの奇に備らす
縵網の相

みほとけのねがひは悲し蹼を壞え殘してぞ度
さむとする

天平佛手

藥師指ただ一莖のなまめきて匂ふいのちに觸
れ敢へめやも

み佛のお指はまろく末ほそになどかわがせむ
あてにあえかに

還つ世のほとけのみ手をささへもち吾は戀ふ
れ亡き妹が直手を

病臥二句

吾妹子が位牌の前に血しほ吐き事態をなげく
ゆとりだもなし

血をはきし病の床に腕伸べて柱をたたく何の
なぐさぞ

關東全區空爆の夜なり痰壺を闇につかみて血
を吐くわれは

吉備彦が思ひやさしく摘みけらし藪萱草のう
まからぬあはれ

病み心いきどほろしも配給日を十日過ぐるに
味噌の貰へぬ

病み床に君が庭べの紅梅をおもふ時しもその
枝たまひぬ

自轉車に乘りて娘のさがしこし卵九つ眞玉の
如し

大擧夜襲を告ぐるラヂオの一點の燈みつめて
病めば苦しる

夜襲爆擊のあやしき闇にたまきはるいのち潛
めて血ははき吐きつ

折からの庭の菜の花雪柳瓶に盈てしめて血を
吐きくらす

さ夜床の枕の上に防火頭巾置きてぞ病めりう
つし身我は

枕より一人靜の鉢みれば春深むまで病みこやりけり

藥のむ毎に吸呑の水かけてひとりしづかの鉢をつちかふ

病むわれに固飯食はすうかららの粥はひときは薄かりなむか

病牀に香りをおくる沈丁花植ゑにし妹のまたかへらめや

佛妻口のきけぬをうつたふる世にも悲しき夢見つるかも

いたつきの痛みに堪へてきその夜の妹と相見し夢書き綴る

四畝半の菠薐草を目にかぞへただにたのみて
病やしなふ

黄泉の妹現を戀へかこの三夜さ夜もすがらわ
れのまなこ冴えたり

枕邊の春も逝くべく花すもも緋の毛氈に散り
かかるなり

紅梅

紅梅をふたたび君の給びしかば紅梅の瓶に紅
梅を挿す

わが壁の多胡のいしぶみの墨搨りにかなひて
映えつ紅梅の枝

鎌倉落花

病床を起きいでくれば琴彈の小橋の眺め春も
闌けにし

琴彈の橋の際なるさくら花一瓣あまさで水に
こそ散れ

散りざくらただよふ水は楓のはやさみどりの
影をひたしぬ

水も狹に浮ける櫻の花片にかつ散りそへり眼
交櫻

川しもに瑞枝ひろぐる若楓癒えかてぬ身の目
見にけぶらふ

ちり櫻橋の下なる水の面をゆたにたゆたひ暮れのこりけり

送別

松本たかし疎開

菜畑に梅散るゆふべ訪ひ寄りて松本たかしみちのくへ去る

病むわれを三たびあひ見て陸奥へ遠別れゆく
君も痩せつる

みちのくのいづくぞ八重畑とふ村にひたすら
いとへ春の寒さを

中村琢二疎開

一瓶の麥酒五人に頒たれて舐るがごとし相別
れなむ

かたき飯心ゆくまで食ひ足りて互みに別るか
なしきろかも

晩春雑歌

山樟の芽立ちは小さき雙の掌を合せて禱るかたちせりけり

家居して筒鳥のこゑ遠しもよ四月盡日午後とのぐもり

風呂敷に野蕗は餘り小田の芹提籠にみてここの日暮らしつ

亡き妻にあが下戀へばしが母を娘は偲ばむか田芹摘みつつ

ひとり居の春の夜更けてかりごもや亂れ心のせむすべもなさ

籠に盛る八重の山吹花數の七八十が垂れおも
りけり

建長寺

葉櫻のかげにいこへば寶前の盥嗽盤を水光り
落つ

うち望む友が住家は藁屋根に山藤の房咲きな
だれたり

二階住みの君が檐端にあしびきの山藤の花い
まさかりなれ

山の藤庭藤のごと咲き足らひ世さがにそむく
きみを慰む

夏季小吟

おのづから苔生に落ちし梅の實のつぶさに觀
れば苔よりも青し

至微きわれのなげきをおしながすかのウヅの
地の約百のかなしみ

墨おろす硯の陸のひろやかに簷の芭蕉のみどり涵せり

血痰を吐きつつもとな巨袋の坂にかかりぬ薯背負ひてわれは

何よりもおのれ斃しそ母なくて子らの四たりが搔縋る身を

夕立の雨ふとぶとと十條ばかり防火水槽の水をたたける

疎開せる子を訪ねきて道端に杏食ひ合ふ泣かむおもひに

幽石軒前庭

白雲木の豐の葉こもり立つ花を玉鈴花とは名
づけそめしか

白雲木の梢こぼるる白花を下枝の闊葉載せて
ひそけし

敗戰

ふるさとにたまたま在りて老母とけふのみ勅
に哭きいさちけり

つなぎ得しわが息の緒はけふのち絶えなば
絶えよ竭しまつらむ

大御詔すでに降りて警報のびびかぬみ空涙ぐ
ましも

許されて今宵ともせる窗の灯に法師の蟬のな
くぞかなしき

庭畑に埋めし物をかもかくも掘らむとすれど
手力もなし

まがなしみ八幡の宮に參來れば杉間とよもし
秋の風吹く

母なき子その就中遠空の末の二人に寒さ來む
かふ

亡妻小祥忌前後

空襲は日を夜を措かねポケットに妻が位牌の
ありて寢起きす

うつし世の身は空襲のいささかのいとまに寫
す波羅蜜多心經

汝がための寫經の料となりてしか去ぬる年買
ひし雀頭の筆

想ひつつ燒酎すする折しもよひときはとよむ
茅蜩のこゑ

くるしくもたもつ命に沁み入りて夕蜩のよよ
と啼きたつ

戰敗れししづもりの底に一年の妻が忌日のめ
ぐるかなしび

人の庭に秋海棠の花乞ひて妹が祀りのよそほ
ひとしつ

忌日けふ炊ぐべかりし白米はすでに腹病む子
に食はせにき

去年のかの臨終の刻のけふの夢にわれをいと
しと告げし汝はも

ゆふされば花びら閉づる玉簾花妹がみ靈の息
づくらしも

空襲にしばしば廚子ゆとりいでて汝が位牌も
安からざりき

ひととせの御厨子守りのをりをりは酒に狂へ
るわれを見しめぬ

さ夜ふけて障子に來啼く馬追蟲の青き透翅も
もののこほしさ

言ひがたき夢さめしかば心經を何遍となくお
唱へまをす

つぶやきをわれに許しね妹が死も永きいくさ
もつひにまぼろし

夜間瀬川

信濃平岡村なる中村琢二畫伯が疎開先にて

旅の夜の枕に重くとどろきて夜間瀬の流れ水嵩増すらし

枕べに蟀跳ねとぶ旅宿り出水の瀬音夜すがらにして

村里の泉に朝の息たちてこころしたしく冬は來向ふ

旅にありて友が情けに食ひ足れば家に餓うる子らし愛しき

來て立てば出水の川はおし垂るる雨雲析きて
響りたぎつなり

秋霖

米負ひて旅ゆくわれに秋雨のしぶきはきびし
きのふも今日も

たたかひはすでに敗れつ信濃路の秋霖雨に濡
れて還るみ靈あり

秋出水稻田をひたす山里にみ魂迎への樂ひび
くはや

雨さむき旅路に艱み數ふれば國裂けて五十六
日を經つ

わが穿つ白の夏靴秋雨の泥にまぶれてはろば
ろに來し

秋艸庵

越後中條の町はづれなる觀音堂が庫裏に會津八一大人をおとなふ

新津驛のほどろの曉に口嗽ぐ二時後に君にま
みえむ

北越のどよもす風に飛びまがふ青き杉の葉踏
みて訪ひ來し

觀音の堂のかたへに結ふ庵の白き障子よ籠り
在すべし

一枚の羽織に足袋をそへもちてわれは來にけ
り旅の長路を

まがつ火を身もて逃ると携へし鞄ひかへて我
を見たまふ

榾消えし圍爐裏に寄りて彼の越のひじりを今
に君ぞおはせる

おりたちて鍋墨掻かす門川の水の凍てつく時
も近けむ

かど川にみづから滌ぐ君がため野菊のいろの
露に冴えたり

草がくる犬蓼の穂のすがれては何にかきみが
まなこ慰む

荒れ朽ちてさむき廚に朝を夕をいとなむ君が
物思はざれや

み手づから大根きざませわが前にあな忝けな
味噌汁たぎる

垣内なる樅も蔽へよ孤り身に老いますます大人に
恙あらすな

北海大風

越後柏崎の濱にいでて狂瀾を觀る

北の海の冬呼ぶ風ぞ砂に這ふ枯莎草を根掘じ
むばかり

吹きあぐる砂を浴びもて重波のとどろの迫り
敢へて觀むとす

われの體は風に屈まり一丈に餘る邊波のくだ
くるを堪ふ

荒海の磯元ゆする高浪の秀さき吹かれて飛沫
奔れり

大浪の頭崩れて横さまになびく水げむり空に
ためらふ

赤にごり沒日射しそふ北海のおらびを耳の聾
ひてこそ聽け

旅上偶成

榛の木に組むが例の稻架を山峽小田は杉の木
間に

夜の汽車の暗き灯かげにとりいでぬ亡妹が書
寫の傘松道詠

加治川原中洲の薄かがよへば堤櫻は葉を降らすなり

をとつひの風に歪みし洋傘をけさは時雨にさして旅ゆく

旅の身は妹を戀しみ佛具屋に入りて購ふ念佛の數珠

西芳寺林泉

苔寺に來しくも著く白壁の築地に沿ひて苔生をし踏む

苔のいろうるほふ頃をあまつさへ時雨過ぎけり苔庭の光澤

けさほどのしぐれを吸ひし毛氈苔に濃染めの
楓枝を延へたり

苔のうへに落葉きよらに寄せられつ松葉は松
葉木葉は木葉に

木根立のこごしきを埋め了せむと勢ふがごと
苔もりあがる

杉苔をい這ふ蔦あり蔓先きのこまかき葉すら
深くれなゐに

苔庭に心おちゐて苔に散る馬酔木の實をしま
つぶさに見つ

木洩日はななめにさして御茶室の明障子の切
貼り清し

松の樹の下には松葉つもりけり萬代苔の甃の
上にして

苔庭を池にくだれば破れ荷葉と折れ伏す蘆と
枯れざまきそふ

苔庭を苔は蔽ひて古池の水の底にも苔ひかる
かなし

苔の庭をめぐりめぐりて池の尻落ちゆく水に
はじめて聲あり

池心の夜泊石に縋り生ふる實生楓も紅葉せり
けり

法隆寺

驛前に借りける傘をいかるがの里の時雨にかたむけてゆく

斑鳩の村の小家も秋茄子を箱に作れり安からなくに

まゐり路の松の並木に捨てられし軍需貨物にしぐれ降りつつ

あまたたび戰もなかに氣遣ひしみ寺望みて泣かざらめやも

築地より枝伸す松の白砂におく影消えてしぐれ來るなり

松の間にひともと紅葉枝延へて八入の雨に濃
ぞめに染みつ

中門の眞赭の柱かい撫づれみ寺もわれもいの
ちなりけり

中門のとびらに殘る過ぎし世の人の眞旅の筆
の跡あはれ

いそしみてみ寺直しの土運ぶ童らよりはたや
國興らむか

廻廊の櫺子のひまに面よせてすさべるみ場な
げき盡きずも

解されて失せにし塔をしぐれ雲みだるる空に
想ひおし立つ

和ぎをたふとしとせしうまやどの皇子のみこ
とはいまし仰がな

薬師寺

塔婆

軒の三重裳階の三重の六重の段見つつし飽かね薬師寺の塔

しぐれきて塔の檐檐暗むなべ裳階の壁のあや
に白しも

ひさかたの天つ時雨に水煙のをとめの纏衣ぬ
れそぼつらし

西塔址石のくぼみの雨水にあなた東塔の影ぞさ
やけき

西塔のいしずゑに佇つわが外に人なき庭を鶺
鴒歩く

草鞋ばきの若き旅びと一人來て塔を仰げりそ
のしぐるるを

佛足石を拜して故里に病あつき母を懷ふ

死近き母をこころに遠つ世の釋迦の御足跡の
石をしぞ擦れ

八十隨好の千輻の文もつ大御足跡死にゆく母
を濟度したまはな

みほとけのみあとはゆたに具足らせり冷き石
にゐりは彫るとも

東塔遠望

東塔に時雨の虹の裾曳けばほとほとしにき旅
の情は

このうつつ現ともなしまなかひに秋の虹たち
塔を莊嚴ふ

唐招提寺

藥師寺をまかりて向ふ招提の道に稻田の蝗跳ね來も

金堂と鼓樓の檐端迫合へる間のかなたに紅葉燃えたり

禮堂を裏手に廻り秋草のしどろの老いをかなしみにけり

枯れそめし草の黃よりもなほ黃にてこの蟷螂も雨に濡れゐつ

古寺をしぐれにぬれてもとほればここに在る身のいのちさびしき

金堂

大棟の四つのくだりをしめやかにしぐれの雨
は流らふるなり

ふき放つ前面の柱めぐりゆきめぐり戻りても
のをしぞ想へ

開山堂

堂内に鑑眞大和上の尊像を安置せり

赭塗りの扉とざせる堂ぬちに和上も聽かむけ
ふの時雨を

室生路

巖床に橡の落葉をつもらせて室生の谿間冬に入るめり

高きより散りぼふ紅葉谿川に浮きてぞしましし朱をとどむる

山川の早湍たまたま曲なして白き砂地を岸にたもてり

ひと年と二月の妻が命日を女人高野の山たどりをり

妹が靈負ひて來にしか室生路の谿のたぎちの水沫をも見よ

猿澤池

猿澤の池の朝靄冬づきて旅の日數もあまたつもりし

さるさはの池のほとりの秋柳水漬く枝より枯れそむるらし

ある朝投身屍體を見る

旅を來しこの池の邊に窮まりて脚絆卷きたる骸さらしつ

志摩

これやこの古き手振りか志摩人ら田舟を浮けて晩稲刈り込む

刈りあとの株すなはちさみどりに穭ふきけり志摩の磯田は

鰈島に朝鳴く土鳩秋ふかき入江へだててこゑのさびしさ

秋凪ぎの英虞の海庭漕ぎ廻みていにしへいまの時もわかなく

あたたかく吹く秋風に志摩の崎伊雑の櫻返り咲きつも

賢島たをり路蔽ふ青齒朶にひかりは澄みて冬
づきぬらし

羊齒群に朱實を垂るる蝦茨海より直の陽はみ
なぎらふ

舟寄せて見らくもわびし島磯に乏しき稻をま
ばらかに乾す

島の背の夜露に立てば天之河熊野が灘へおし
かたむけり

島かげのきよき細石にかつむすぶ潮泡白し暮
れかかりきつ

英虞の海秋さわやかに遠展け紀伊のはたてに
日は落ちむとす

眞珠賣る店の硝子戸小港の秋の沒日を照りかへしたり

くれなゐに夕雲映す入海の曲に沿ひゆく旅人われは

蒼潮を舟にのぞけば秋の日は底に及びぬその清砂に

外海の空のまほらの夕茜渡らふ鳥よこころはるけさ

たらちねの母

昭和二十年十一月二十二日母高崎にて逝く享年六十七眞宗を篤信しおよそなすべきをなしたるの人なりき

ことときれし母がみ手とり懐に温めまゐらす子なればわれは

蠟の灯の五つの彩の暈奇し死にませる母のその枕邊に

去年妻をなくしし我をいやましにいとしみまして母は逝きにき

息の緒の絶ゆればすでにみ佛の母に唱ふる稱名念佛

たらちねの死装束をひらきみていまさらさら
にわれは哭きけり

墓口にさぐりて得つる穴銭を頭陀の袋に納め
まをしぬ

通夜の酒母のめぐみといただきて醉ひつつも
とな涙しながる

白き鬚膝に觸るまでうなだれてとむらふ父を
母も嘆きぬ

霜月のひかりすがしき聖石橋母の柩はいまわ
たりゆく

柩挽く小者な急きそ秋きよき烏川原を母の見
ますに

ひつぎ車搖れゆくまにま打掛けの錦の袈裟に
秋陽かがよふ

添ひあゆむ母の柩に村里の欅のもみぢ散りか
かるなり

なきがらの母をとどめて山坂の紅葉のかげに
われらは憩ふ

堪へかてにわが敲つ鑒のごんごんとこの世の
母は燒けたまふなれ

たらちねの母を燒く火のほのほだち鐵扉の隙
に見ざるべからず

秋の日は黄いろくさして蟲啼けり燒場の裏の
賽之河原に

逢坂の雑木黄葉の梢を這ふけぶりを母と思ふべきものか

上州富岡にて納骨の折に

いだきゆくお骨の母よ桔梗の畑のこの道いま通るぞも

妻の骨けふ母のほねひと年にふたたびひらく暗き墓壙

とことはに母を埋めて見放くれば御荷鉾の山の斑雪蒼しも

またおもひいでて

在りし日の母が勤行の正信偈わが耳底に一生
ひびかむ

寒蟬集終

後記

昭和十一年『苦徑集』といふ家集を編んで、これに先立つ十二年間の作歌六百十三首を世に問うて以來、もはや十年餘りを閲した。この間も自分は孜々としてこの一筋にはげみ、およそ千七八百首を詠み得たが、ここにはその中から、昭和十九年夏より翌二十年秋に至る一年數箇月のあひだの制作四百四十一首をとり出でて、ひとまづ一卷とした。

本集に收めた歌の大部分は、既に、『創元』『人間』『象徴』『群像』『苦樂』『知慧』『創造』『文藝春秋』『新生活』『新風』『知音』『婦人文庫』『女性』『婦人朝日』『婦人畫報』『週刊朝日』『毎日新聞』『讀書新聞』『夕刊新潟』『夕刊新大阪』その他の諸雜誌諸新聞に發表した作品であるが、發表してここに加へなかつたものもあり、改竄を經て加へたものもあり、新たに補作したものも二三十首はあるであらう。

秋艸道人會津八一先生が特に題簽を賜り、卷扉を飾り得たことは、まことに身にあまる光榮である。また畏友小林秀雄兄が、自分の歌魂を信じて本集の印行を慫慂し、懶惰な自分を折にふれて激勵してくれたことに對しては、衷心感謝を捧げずにはゐられない。

卷名の『寒蟬集』は漢音のままにカンセンシフとなへんことを冀ふ。寒蟬の文字、『倭名抄』には「加牟世美」と訓じてあるが、自分はなほカンセンの語音の清澄を愛する。また寒蟬の實體がホフシゼミかヒグラシゼミかは、源實朝の立秋の歌に見える「寒蟬鳴」及び「山の蟬」の語の解釋にもからんで、夙に論あるところだが、自分はただおほまかに秋蟬の意として用ゐたのである。この集、妻の死を哭する歌によつてはじまり、母の病をうれへこれを葬ふ歌をもつてをはる、一は初秋他は中晩秋、いづれもその悲愁の日かず、秋蟬の唧噴の韻きと分つことはできない。もつて、これを冠して一卷の表徴とした次第である。

昭和十九年この方はそもいかなる歳月であつたらうか。國びと誰かその苦楚を嘆じない者があらうか。まして自分はたちまち家妻を奪はれて四兒護育の任を孤肩に負ひ、戰爭の劇化と共に困憊いよいよはなはだしく、羸軀の瘦骨、ためにまつたく歪曲した。亡き者が臨終に際して、みづからの痛恨を隱し、却て、生き殘らねばならぬ自分の勞苦をいたはつてくれたことも、故なきことではなかつた。しかし自分は本集に揭げたやうな歌を、たまきはる命かけて詠み出づることによつて、自分の懊惱を客觀的ならしめ、よつてからうじて生きゆく意志にかい縋ることができた。これは二十年三四月の交の病臥についても、八月敗戰の後の生活の混亂についてもまた同じである。もしも自分に自分の歌がなく、自分の歌が自分の精神を昂揚することがなかつたならば、どうして自分に今日の存在があつたらうか。想へば、自分は實に藝術微妙の力に感激を新たにせざることを得ない。

二十年早春の頃、親しい二三子と數日を伊豆に旅したことは、恰

も空襲のさなかであつたとはいへ、前年來の自分の憂患をややときほぐし、詠風もおのづから明色を帶び來つた如くである。また終戰後、信濃を經て越後に入り、これより先き、東京に戰火を蒙つて疎開せられた會津八一先生を中條の里におとなひ申し、つづいて京都、奈良に十餘日を過して、やや久しぶりに古寺を巡禮し、歸途志摩半島に廻つたことも、米麥を負うての容易ならぬ旅ではあつたが、なほ心を責めて、多少の感慨を制作に託することができた。

自分は昔經濟の學に志した者だが、二十二三の頃たまたま正岡子規の竹乃里歌を讀んで作歌に興味を覺え、その系統たる伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、齋藤茂吉等諸大人の歌集にもすこぶるまなぶところがあつた。また一方、大正十四年、會津八一先生の『南京新唱』を手にして愛誦措くこと能はず、やがて機因熟して秋艸堂の門扉に門人として出入するに至り、親しく提撕をうけること、いまは二十年にも及んだ。先生、數ならぬ自分に慈愛隈なく、策勵叱咤を加へ

てひたすら孤高の詩心を打成すべきことを訓へたまひ、輕々しく詠草を江湖に示すなどのことを快からずとするの風があられたので、自分は身をひそめて實作に專念し、わづかに鎌倉短歌會を組織して、四五の人々と毎月近詠を互評し且つ古書を輪講することと、友人の編輯する歌誌に時に若干の歌を投ずる位の範圍で自らを戒めてゐた。しかるに、一昨年の春、富士山の歌十數首の叱正を乞うた折、先生は例になくこれを賞讃したまひ、ここにはじめて歌よみの一人として公然世に立ち向ふことを許されたのである。永年の鉗鎚に酬ゐることのできたこの時の自分のよろこびこそいかばかりであつたらうか。すなはち、その後はもし發表をもとめる人あらば、拒まずに詠作を附することとし、かくて一年にして四百餘首に達したのである。

自分の歌歴はかくの如く單純であり、何の語るべき特質もない。しかも、歌といふものは、年少より事に當つて營々工夫を重ねつつ、齡五十を超えてやうやく一人前になれるかなれぬかの至難の藝術であることを信じてゐる自分としては、素よりおのが現在の程度の歌

8755

を甘なふわけにはいかない。ねがはくは、識者のきびしい批判をうけて今後いよいよ渾身の精力をこの一道に注ぎ、念々の稽古を積んでいつかは至妙の境地を窺ひたいものである。

昭和二十二年二月下浣

吉野秀雄

後記終

歌集寒蟬集

昭和二十二年十月十日印刷
昭和二十二年十月二十日發行

定價百圓

著者　吉野秀雄

發行者　矢部良策
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所　株式會社　創元社
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
電話茅場町(66)二四〇六番
會員番號A二九〇八三五一番

印刷所　鈴木製本所